

つながるひろがるフェミ・ジャーナル ふえみん

WOMEN'S DEMOCRATIC JOURNAL / *femin* ふえみん 婦人民主新聞 No.3216 2019/04/05
[毎月5, 15, 25日発行]

contents	
2	福島原発事故被害をジェンダー視点で考える
3	放射性ヨウ素と甲状腺
4	福島原発がなぜ訴訟判決をうけて
5	劇場版『沈没家族』、加納土監督に聞く
6	DVD『リンクル・イン・タイム』

ボンナレットさんは1964年、ブーンペンで国立図書館長



「ボル・ポト政権下の体験は思い出すのもつらく、語りたくなかった。けれど、も頼まれて話をするうちに、生き抜いてきた自分に誇りがもてるようになり、書くことで、私たちがここにいるか、何者かを理解してもらえようになった」

女性文化賞を受賞した 久郷ボンナレットさん 被害者と加害者の対話から和解

ボンナレットとは、カンボジア語で「輝く子ども」という意味。燦々として立つボンナレットさんの目からは力強い光が放たれる。ボル・ポト政権による虐殺を生き延び、15歳で来日、16歳で小学校に入り日本語を学んだ。その体験を3冊の本に綴り、2018年度女性文化賞(注)を受賞。理由は「学びたいという強い意欲をもって、発信する力を自分で獲得し、母語でない日本語で本を書き、その中で過酷な体験を訴えるだけでなく、対話を通してお互いに和解し、平和な世界をつくりたいと訴えてきたこと」だった。

の父親、女学校教員の母親と8人きょうだいの家庭に育った。ブーンペンは活気のある美しい街だった。「お母さんは『勉強しなさい』なんて言わない。雨の日びしょぬれになって遊んでも叱らない。お父さんは満月の日にはバイクでメコン河のほとりをドライブしてくれる優しい人。しかし75年、10歳の時、ボル・ポト率いるクメール・ルージュが政権をとり、この幸せは崩れた。知識階級、都市住民は敵視され、ブーンペン市民は農村地帯に強制移住。父親は連行されて帰らず、前年日本に国費留学した長姉だけが難を逃れることができた。

トさんも飢えからカエルや野ネズミまで食べ、酷暑の下、煙で森の開墾や田んぼの造成、イモの栽培をし、マリアによる高熱など、厳しい体験をした。偶然、2人の兄と再会して、政権崩壊後も内戦状態が続くなか、命がけで地雷原を通って国境を越え、タイの難民キャンプにたどり着いた。そこで日本のNGOとつながり、姉のいる日本に来たのだった。「平和な国、日本へ」という期待の目に映る東京の夜景は輝いていた。

しかし日本で待っていたのは「難民」という立場だった。ブーンペンの7畳にひと家族が寝泊まりし、朝はカツララーメンをすすめる難民定住促進センターで

の暮ら...
連れ出...
とはか...
日本語...
を出た...
での記憶...
苦しむ...
めにも...
勉強も...
抑えきれ...
生に編み...
動きなが...
日常...
がなく...
募集...
行つても...
れる。...
は「コ...
と蔑まれ...
た。も...
「難民...
い浮か...
「どう...
枠には...
ンナレ...
だカン...
結婚...
にも帰...
虐殺さ...
はどっ...
が夢の...
ここか...
声が聞...
いわれ...
骨はま...
来日し...
ようやく...
の丘に...
じ場所...

レットさん Kugo Ponnareth

話から和解へ

創えからカエルや野ネ
も食べ、酷暑の下、裸足
開きや田んぼの造成、イ
ををし、マリアによる
て、厳しい体験をした。
人の兄と再会して、政
後も内戦状態が続くな
けて地雷原を通って国
へ、タイの難民キャンプ
り着いた。そこで日本の
つながり、姉のいる
来たのだった。「平和な
本へ」という期待の目に
の夜景は輝いていた。

日本を待っていたのは
という立場だった。ア
7畳にひと家族が寝泊
朝はカツラーメンを
難民定住促進センターで

「ボル・ポト政権下の体験は思い出すのもつらく、語りたくなかった。けれど、
も頼まれて話をするうちに、生き抜いてきた自分に誇りがもてるようになって、
書くことで、私がなぜここににいるか、何者かを理解してもらえようになった」

の暮らし、学生の姉がたまに
連れ出してくれる外の街の繁榮
とはかけ離れていた。3カ月の
日本語習得期間ののちセンター
を出たものの、夜はカンボジア
での記憶のアラツシエバックに
苦しむ。「日本で生きていくた
めにもっと日本語を学びたい、
勉強もしたい」という気持ちを
抑えきれず、公立小の4年
生に編入して、19歳で卒業後は
働きながら夜間中学に通う。

日常に使う日本語は不自由
がなくなった。しかし「店員
募集」の張り紙のある飲食店に
行っても、顔を見るだけで断ら
れる。ようやく見つけた職場で
は「エキゾチックな色黒」
と蔑まれ、胸を触られたりもし
た。もっとも傷ついていたのは、
「難民」というと、あなたが思
い浮かぶ」という言葉だった。
「どうして私は「難民」という
枠にはめ込まれるのか。私はボ
ンナレットという「個人」、た
だカンボジア出身というだけ」

結婚後、2度ほどカンボジ
アにも帰ったが、母親や姉、妹が
虐殺された丘に足を向けること
はどうしてもできなかった。だ
が夢の中で「お願い！早く
ここから助け出して！という
声が聞こえた。7000人と
いわれるその丘での犠牲者の遺
骨はまだ吊られていなかった。
来日して25年後の2005年、
ようやくボンナレットさんはそ
の丘に立ち、自分の家族と、同
じ場所で亡くなった人たちの合

同慰霊式を、村人たちにも参加
してもらって執り行った。実は
彼らは当時はボル・ポト政権側
にあり、移住させられてきた都
市住民を迫害し、中には手にか
けた者もいた。幼かったボンナ
レットさんにとっては鬼のよう
な存在だった。

19年2月、この地を再訪す
る。当時の村人と対話がした
かった。一番の権力者だった
村長は高齢だが健在で、「よく
生き延びたね」と驚く村人た
ちは、年齢相応の「普通」の老人
になっていた。逆にいえば「普
通」の人間が時代によってい
くらか残酷になれるのだった。

「彼らに対する憎しみはな
い。けれども彼らが加害の側に
回ったのは仕方なかったと、簡
単に認めることもできない。自
分の中に葛藤があるが、まず対
話を積み重ねることで、私も彼
らも真実に向き合い、それを受
け入れ、和解に進みたい。憎し
みの連鎖は何も生まないから」

注 1997年に高良留美さん
が女性の文化創造者を奨励、感謝
する目的で創設し、2017年
から「らいつの家」館長米田佐
代子さんが引き継ぐ。

聞き手…岡田豊紀
撮影…落合由利子

profile
くどう ばんなれつと
1964年カンボジア、アナンバン生ま
れ。75年アナンバンから強制退去。
80年渡日。家族は日本人の夫と2児。
著書に『色のない空』、『19歳の小学
生』、『虹色の空』(日本語版、カン
ボジア語版)。姉が経営するカンボ
ジア料理店を手伝いながら、各地で
平和の大切さを訴える講演を行う。

現代書館
読書と教育 戦中派ライブラリアン。
「本を読む」と繰り返して語った伝説の国語教師。その読書・教育
生涯を教養の毎日新聞元論説委員が熱く語る。後藤正治氏推薦
「当たり前」をひっくり返す
——バザール・ニエリ・フレイレが奏でた「革命」
精神病院をなくしたバザール・ニエリ・フレイレの革命の果敢を
たニエリ・フレイレの抑圧性を告発したフレイレの革命の果敢を
季刊 福祉労働 162号
特集 早期発見・早期療育の現在——発達障害の広がりの中で
地域療育・障害に特化したサービスが起る早期から整備されたこ
よる、親の意識、保育・療育・医療・発達相談現場の変化を鋭く

あけび書房
これからの天皇制と
道徳教育を考える
教育勅諭と道徳教育復活そして天皇制の在り方が問われる。諸問題を整理
推薦 堀尾輝久(元大教組委員長)
石山久男(元道徳教育協議会委員長)
ベル・フックスの「フェミニズム理
ベル・フックス著 野崎知子 毛塚美津子 訳 フェミニズムとは一体何か？
にフェミニズムを簡単に説明し、運動のあり方を提起した著者の綱目行 2400円

最新刊
梨の木舎
広がる食卓
——コミエニチ・レストラン
●「分かれ道の継ぎ」でいきます。全国のコミエニチを紹介します！
金子文子 手記・調査歌・年譜 「魂の断片」(読者)
わたしはわたし自身を生きる
●文子の獄中手記「何が私をこうさせたか」を全文収
「天運」で死刑判決後に「魂の断片」を綴る。全人の人間である
うた一つ一つの真実によって平等な人間に近づいた22歳 2800円

高橋陽一 著 【新刊】
くわしすぎる
教育勅語
一八九〇年のエリートた
ちが書き上げた三二五字
の「名文」は何を目指した
のか？一字一句の由来と
文章の構造をあきらかに
する徹底的な読解を通し
巧みなレトリックと埋め
まれたフェイクを味わう。
●本体二〇〇〇円

杉本彩さん推薦！
「動物の痛みと苦しみ
と恐怖を知ってほしい」
犬が殺される
●動物実験の闇を探る
あらゆる分野で人類に関係している動物実験。
だがその実態はほとんど知られていない。
日本の動物実験の現状を粘り強く追う渾身のルポ。
好評既刊 常磐の木 金子文子と朴烈の愛
鋭敏の韓国人女性作家、キム・ヒョウが
描く金子文子の戦時恋愛と闘いの物語
後藤正彦 訳
2000円